

就業力の可視化②

コンピテンシーが伸びる学生・伸び悩む学生に二極化している

大学教育総合センター 市村 光之

学生たちの就業力を可視化するため、本学ではH25年度より、就業力を測定するアセスメントとしてPROG(河合塾とリアセック社が共同開発)を希望者に実施しています。前号のニュースレターで、対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力というコンピテンシーの3カテゴリーのうち、「対人基礎力」、言い換えるとコミュニケーション能力が就業力を伸ばすキーファクターであることを説明しました。今回は、3年間のアセスメントの結果を踏まえて、この点をさらに詳しく解説します。

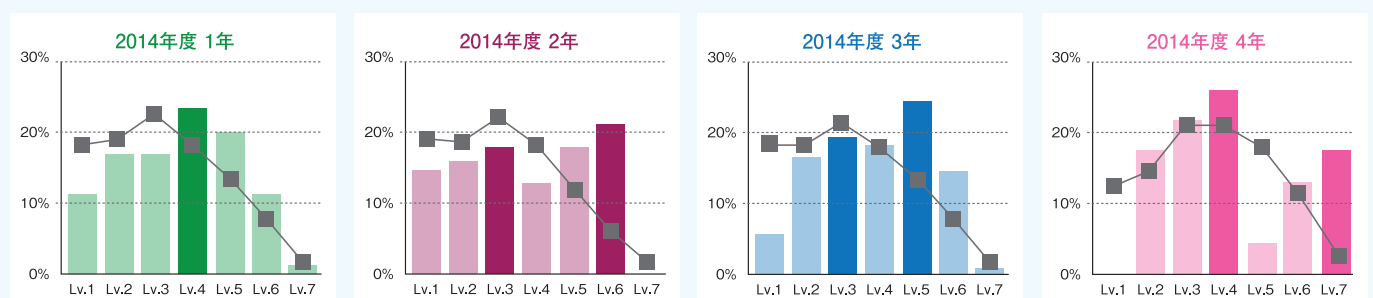
学年進行に伴い、伸びる学生と伸び悩む学生に二極化する

就活の場で、熱心に活動する学生とそうでない学生の二極化が問題視されています。グローバル化の観点からも、留学など積極的に海外と係わる機会を求める学生とそうでない学生とに二極化していると言われています。残念ながら就業力においても、この《二極化》傾向が進行していることがわかりました。

アセスメントはリテラシーとコンピテンシーに大別して測定されます。《リテラシー》は、知識を習得し、それらを活用して課題を解決するためのスキルであり、学力に比例します。本学学生の測定値は全国平均を大幅に上回っていることは、前回レターの「就業力の可視化①」で紹介した通りです。一方、《コンピテンシー》は経験から身に付けた行動性向であり、学生生活を通じて学業のみならず、サークル活動やアルバイトなど社会集団における他者との関わり合いを通じて培われる能力です。1年生の測定結果を比べると、本学学生は全国平均よりややよい程度で、リテラシーほどの差はありません。つまり、社会人に求められる行動性向の到達度合いは、スタートラインでは学力に係らず全国的にほぼ同じであり、大学生活の4年間でどう伸ばすか、が問われているのです。

グラフ1は、H26(2014)年度のコンピテンシー測定結果を学年別に表したものです。棒グラフが本学、折れ線グラフが全国平均

グラフ1:コンピテンシーの学年別分布



均です。なお、コンピテンシーは7段階のレベルで表され、入学段階で持っているほしい能力がレベル3、卒業までの身に付けてほしい能力がレベル5です。

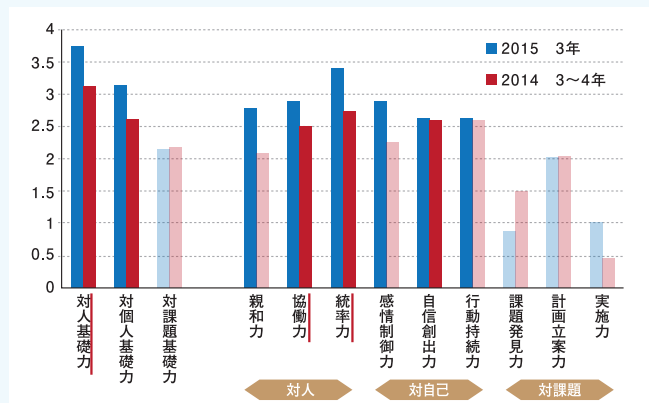
1年次のグラフを見ると全国平均よりややよい、レベル4を頂点に山形を形成しています。学年が進行するにつれ、徐々に右(上位レベル)に向上しているものの山形は崩れ、4年次ではレベル4とレベル7を頂点にした絶壁型、または双頂の山型に分化しています。潜在能力を開花できた学生と伸び悩む学生に、二極化が進んでいることがわかります。

伸び悩む学生は、対人基礎力が弱い

就業力が二極化する要因に関して、明らかになったことが2つあります。第一に、《対人基礎力》にコンピテンシー伸び悩みの原因がありそうということです。コンピテンシー上位層と下位層に分けて比べると、対人基礎力の差が最も大きく、対自己基礎力が続き、対課題基礎力の差はそれほどではありません。

グラフ2は3年生のコンピテンシー総合評価の上位層(レベル5以上)の平均スコアから下位層(レベル3以下)の平均スコアを引いた差を示しています。2015年の3年生の「対人基礎力」では、上位層が5.9、下位層が2.1で、その差は3.8です。対人基礎力の下位項目(グラフ中、右側の9項目)を見ると、統率力、協働力、親和力の順で差が大きくなっています。グループ活動

グラフ2:コンピテンシー上位層と下位層のスコア差



に参加(親和)はできても、積極的な参画(協働)や主体的な貢献(統率)ができないと解釈できます。その結果、自分の集団参加に自己効力感を高められず、「対自己基礎力」の下位項目である「自信創出力」なども向上しないのではないのでしょうか。「対課題基礎力」は頭を使うスキルであり、他者との係わりが不十分でも個人作業でカバーできる部分が多く、上位層との差が少ないのかもしれませんが。

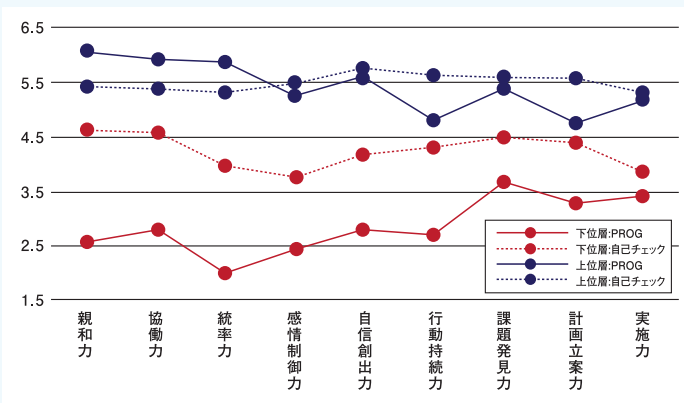
コンピテンシーは3カテゴリーのうち、①対人基礎力の向上を起点に②対自己基礎力が強化され、最後に③対課題基礎力が伸長する傾向にあります。①様々な人間関係の中で相対的に自分の課題を自覚し、②それらを克服する努力を進めることで、③グループ活動に主体的に参加できるようになるのでしょう。コンピテンシー向上のキーファクターは対人基礎力なのです。

自己認識が甘く、自分の改善課題を把握していないのが伸び悩みの原因

二極化要因として明らかになった第二の点は、コンピテンシー下位層は上位層に比べ、自分のコンピテンシーに関する自己評価が甘いことです。今年度はアセスメントに先立ち、新たに導入した「就業力自己チェックシート」にも回答してもらいました。グラフ3は、アセスメントのスコアと自己チェックのスコアの差を、コンピテンシー上位層と下位層に分けて表したものです。グラフの9項目の平均値(7段階評価)では、上位層はPROGより自己チェックが+0.1と近似値を示したのに対し、下位層は+1.4と乖離が見られました。「自己チェックシート」の内容が妥当である前提で解釈すると、上位層が自分の実力を適切に認識しているのに対し、下位層は実力以上に自分のスキルを評価している、または勘違いしていることになります。生真面目な本学の学生気質からすると、自分を過小評価しがちなのでは、と予測していましたので意外な結果でした。

コンピテンシー下位層でスコアの乖離が顕著なのは「対人基礎力(親和・協働・統率力)」で、「対自己基礎力(感情抑制・自信創出・行動持続力)」が続き、「対課題基礎力(課題発見・計画立案・実力力)」では乖離が少なくなっています。前述のスキル伸長の起点である対人基礎力がやはり課題ということになります。下位層は対人関係において自分に課題があるという

グラフ3:自己チェックとPROG結果の上位・下位層比較スコア差



自覚が希薄で、むしろできていると過大評価しているため自分の問題点を認識できず、その結果、スキルを改善できず伸び悩んでいることが窺えます。

社会人に求められる対人基礎力は、年齢・役割・バックグラウンドなどが異なる多様なメンバーと協業する際に発揮される主体性ある対人スキルです。一方、学生たちが慣れ親しんでいる人間関係は、学生同士を中心にして同質な仲間との係り合いであり、教員との関係では教育を受ける立場として受動的な係り合いになりがちです。この違いに、コンピテンシー下位層の自己評価とPROGとのずれの原因がありそうです。一方、上位層は学生生活を通じて社会人を含め多様な人間関係を経験し、客観的・相対的に自己分析し、自分の問題点を認識できるのでそれらを改善して、スキルを向上させていると推測できます。

アクティブ・ラーニング、初年次教育で伸び悩む学生たちを覚醒させる

入学段階で、少なくとも学力方面では大きな差がないはずの学生たちが、なぜ二極化していくのでしょうか。何が伸びる学生と伸び悩む学生に分けるのでしょうか。社会人と真剣勝負で対峙する就活、ゼミ等での議論の深化、卒論やレポート作成での論理的・科学的思考の鍛錬、さらにはサークル活動やアルバイト、社会人や外国人を含め多様な人々との係わりなど学生生活全般での人間関係の差が成長度合いに影響することが考えられますが、因果関係は明らかではありません。今後、この《就業力の可視化》の取り組みの中で継続的に探っていきます。

いずれにしても、二極分化していく下位層の学生たちをいかにして浮上させるか、が急務であることは間違いありません。都合のよい特効薬はありませんが、大学教育の観点からは、やはりアクティブ・ラーニングの推進が求められます。教員と学生、学生同士の係り合いから自己を深く内省させ、改善を図るプロセスを通じて、学生たちは自己認識が深まり、二極化の原因となっている「対人基礎力」を向上させることができます。加えて、入学後の早い段階で、学生たちを《高校4年生》状態から大学生に覚醒させること、正解のない課題に主体的に挑む大学での学びの姿勢を身に着けさせることです。その意味で、初年次教育の意義はますます重要になっています。